

北満の記録(四)抑留

抑留生活の記録

一九四五年八月十五日 太平洋戦争の終結（敗戦）。八月十八日 停戦命令を受ける。

一九四五年八月から、一九四八年十二月一日までソ連の捕虜としてシベリア地区に輸送され、收容されてからの收容所の生活、労働の苦闘の実態を記録として残したい。記録中に出てくる戦友、同胞の名前は伏せておくこととする。

日本が各地の戦線での敗戦、玉砕の戦況も、沖縄の全滅、広島、長崎に投下された原爆のことなど一切知らされず、ただソ連軍の進攻状況のみが入ってくる。しかし、ソ連の満州進攻で、日本本土孤立と敗戦は分かっていた。

後日分かったが、本隊部落に着き合流した日が、知らずも、日本が連合軍に降伏した日であったのだ。しかし誰一人として知る人はいなかった。停戦後も、至るところでソ連軍と交戦し、多くの戦死者が出ていたのだ。本当に無駄死にであった。

本隊も佳木斯（チャムス）出発のときは装備もあり戦闘態勢の行軍であったのだろうが、日夜にかけた強行軍で爆撃を受け、一週間もの死の行軍で到着した将兵は、疲労困憊し、仲間の顔を見て安堵したのか、つぎつぎ倒れる者も多くあった。

我が軍にとっては不利な戦況ばかり入ってくる。何処で知ったか聞いたのか、重大なことが伝わって来る。

日本の広島・長崎に、とてつもない大きい爆弾が投下され街は全滅したこと。日本がアメリカに破れ、停戦になったとか、信じられないことばかり。

それでも上部から最近、いろいろな情報が飛んでいるが上層部からの命令があるまで、皆動揺しないようにとの、部隊本部より指示があった。

停戦命令（終戦）

昭和二十年八月十八日。

久し振りに天気も良く、気持ちのよい朝であった。

朝の点呼の時の伝達で、部隊長より重大な発表があるので、九時三十分までに全員（部隊）が広場に集合するよう指示された。

九時三十分、部隊全員が集合した。二百名くらい居ただろうか、部隊長から発表があるということで、一部では知っている者もおり動揺の中部隊幹部がおもむろに告げる。

「只今から部隊長殿より重大な発表があるので静かに聞くように」と八月十五日、日本が連合国に降伏したことを発表する。

しばらく動揺がつづく…少しして、八月十五日正午に発表された、天皇陛下の終戦の詔書が読みあげられる。一字一句をかみしめるように、緊張して読み上げる。我々もまた一言も聞き漏らさじとするが、部隊長も言葉に詰まり涙声で読むので、ところどころ不明なのだ。しかし、歴然とした停戦の詔書なのだ。

今日まで張り詰めて居た気力も、失って行き、誰一人として言葉を発する者もなく、ただうなだれ、無念の涙にくれるばかりであった。これで戦いはすべて終わったのだ。

次の命令があるまで、全員が幕舎で待機していた。部隊幹部から「間違つた行動を慎むように」との指示があつた。

司令部より命令が通達される。

「各人天皇の命に従い、全面降伏の意を体し、対国、ソ連軍の命令に服従せよ」と、

十九日、十時頃ソ連軍の将校、兵隊五、六名がジープでやつて来た。

朝から土塀の門入口には、白旗が掲げられている。部隊長、将校が出迎える。やはり勝者の態度は横柄だ。入口にある一軒の家を明けて、彼等に提供する。

飲料水から食事(パンその他指示)まで用意してくるよう指示する。

彼等は自分の食糧携帯はない、あきれたものだ。そのうえ日本人の持っているものは何でも珍しく提供するように指示してくる。逆らえば大変なので、適当なものを差し出して機嫌を取る。上級将校(責任者)はそれほど無理を言わないが、付属下士官や兵隊が悪く、物の無いところから来た「がき」のようだ。

一目で彼等の程度(頭脳)が分かる。こんな奴等に負けたとは情けない。相手の程度が分かると、後は日本人の方が上だ。彼等をごまかし、扱いを有利に運ぶ。彼等は時々方正の部隊に連絡のためジープを走らす。彼等の持つている銃も、各人がみな自動小銃を持っているし、時々空に向かつて銃を発射する、威嚇射撃だ。自動小銃なので機関銃を撃っているような音であり、突然なので、何事が起きたかとびつくりする。

彼等もいかに勝者とはいえ、大勢の日本兵に対し、少数の監視兵では不安があるので、ときどき銃で威嚇するようであつた。第一線にいる将兵にとって、日本が負けるとは、誰一人として夢にも思わなかつたであらう。

兵器と弾丸さえあれば、反撃してやったのにと、誰もが悔しがつた。

武装解除と逃亡(敗戦)

ソ連軍が入り、真つ先に武装解除が始まる。

兵器と言つてもほとんどなく、提出に先立ち菊の紋章は全部削り取り銃身を折り、すべて再使用不能にして出す。一部拳銃等隠した者もいたが、後に保管仕切れず土中に埋めた者もいた。

我が身を守る銃器も敗戦となれば、ゴミ屑のように扱われるのだ。

ある者は自暴自棄になり、酒をあおり(チャンチュー、コウリヤン酒など四十度もある強い酒である)。ある者は二・三人集まり、今後の相談など、また逃亡を企てる者もいる。昭和十九年秋に入隊した中に、若い朝鮮人の兵隊がいて、二・三人くらい続いて逃亡した。

逃亡は、十八日停戦発表の夜から始まつた。停戦になつたら、ソ連の捕虜となり何処へ運ばれるか分からない。捕虜になるより逃亡と言うのである。

しかし、北満から朝鮮へそこから日本へ、大変な距離であり、冒険なのである。逃亡は二・三人くらい組んで決行しようだ。

ほとんどは朝鮮出身者であり、他にも数人いたようだ。朝鮮は満州と陸続きであり、人種も満人と似たところがある。言葉も若干通じるのでいろいろ有利な面が多く、朝鮮までは、何千キロメートルもあり、多くの障害もあるがこの機会を逃したら、今後どうなるか分からないのだ。

日本国の敗戦で、日本人と朝鮮人の差別、彼等はすでに人種間の違いを悟つて自由を求めての行動であつたらう。

夜の点呼となつて週番が来て「全員いるか」(日中のうち逃亡者がある

も、無事に元気で行けよと見送る者も居り誰もが知っている。()

「誰々が出て行った！」と聞くだけ。

日中の逃亡はソ連監視兵の目を、他の者がごまかし逃亡を助けたりする。仲間に伝え別れを惜しみ、互いに励まし別れる者、黙って出て行く者もいた。朝鮮人と一緒に出て行く者もあり、二日間だけで我が斑からだけでも、二十名中七名が出て行った。

別れに際し、これ餞別だと言って金を渡す者、タバコを渡し送り出す者もいた。残った者は、どうにでもなれと、運を天に託すだけ。

幸せだったことは、日本が戦に負けたが満州の部落の長が、殊の外親日家で、部落民を治めていたので、初めから最後まで、温和に何かと世話をしてくれた。

日本が負けたことで、自分たちの今後のことなど、随分心配していたようだ。我々が最後にこの部落を去るとき、多くの食糧や、物資を置いて来た、せめてものお札にと。

糧秣輸送

敗戦、停戦になっても、食糧や日用品、衣類の確保が大変だ。ことに連日の雨降りや泥沼の悪路だ。いかにして運ぶかだ。あるとき司令部より、糧秣・被服の受領の指令がある。

百頭近い部落の馬も、兵器と一緒にすべてソ連軍に引き渡し、何処かへ移動されてしまい、一頭も残っていない。部隊に残っている者ほとんどが出勤し、しかも夜中の出勤である。部落から方正に出て、そこから更に北へ二十キロほどの松花江の江岸の船着き場である。

方正に着くと他の部隊は、もう行っているので、早く行かないと無くな

ると脅かされる。空身とはいえ、夜の泥道の行軍なので大変だ。道の良い所へ来ると駆け足とくる。先頭と後部が離れると、先頭は止まって待つ。後部が追い付くと、ちよつとだけ休んですぐ出発する。

先頭は多く休めるが、後部の者はたまらない。遅れまいと必死だ。喉はカラカラ「おい水があるぞ」と誰かが叫ぶ。辺りはまだ暗く全く分らない。手探りで道の小石を拾い、道から四・五メートルの所へ投げしてみる。「ポチャン」水の音だ。

今立ちションをした辺りから降りてみる。「水だ！」。しかし、どのような水なのか分からないだがそんなことを言っていられないほど喉が渴いている。これ以上走つたら、ぶつ倒れてしまう。一口手で掬って飲む。「うまいつ、実に旨い」冷たくて、顔を洗うと眠気が覚める。余り飲むと大変なので、適当に飲んで止める。

再び出発、五・六分の休憩での行軍が続行される。

夜がしらじらと明け始めた頃、やっと入り口に着く。ここには軍で徴用した満人の荷運び人（クーリ）が居て部隊で数十頭のロバのような小さい馬で、力はめつぼう強い。この馬とクーリが三・四人で一台の荷馬車をつれて船着場へ行く。

広い船着場一杯に軍用物資が山と野積みされている。いつの間にも何処から運ばれてきたのかと、驚くばかり。物資不足で国民が食うや食わずに、絶え忍んできたのに何処にあったのか。何千何万とも分からない米袋が、うず高く積まれて居るのだ。

その他、被服や甘味品、調味料に至るまで、所狭く積まれている。

糧秣支給将校の指示で、部隊の支給品が次々荷車に積み込まれ、全部積み終るまで一列に並んで待つ。一台に満人一人（馬主）兵が二・三人付く。

兵の中にはかなりすばしい者もいて、一寸の時間に一回り偵察して、何処に甘味品の箱が積んであったかを確認し、誰も居ないから取りに行こうと言う。四・五人が組んで見張りから、運搬、抜け目なく行動し持ち帰る。

結構悪いこともする。しかし残したらソ連に持って行かれてしまうので糧秣でも将校(日本)は余分に積めるだけ積ませるのだ。

ソ連の監視兵が居るので、その目を逃れればよい。ここで昼食の支給を受け、午後一時頃出発する。五十台近い荷馬車の出発だ。一本道で、長い列のため、なかなか思うように進まない。道が悪いので積み荷を縛って居る荒縄が緩むのだ。先が止まれば、後は皆止まる。道が狭いので、追い越すことも出来ない。道中、昨夜来る途中休憩し、水を飲んだ辺りに来た。

辺りを見回すと道の両側に、葦が生えており雨で増水して、沼のようになつて居る。その近くに馬の死んだものが浮かんで居る。皆啞然とする。「知らぬが仏」とはこのことか、よく何でもなかったものだ。方正の町に着いたのはもう夕方であった。この頃になると隊列もすっかり乱れてばらばら。

満人も文句を言いだすし疲れてくたくた。馬の力だけでは足りず凹地に入ると、押したり引いたりで大変。先頭はもう帰隊したかも知れない。先頭ほどあまり車が通っていないので、比較的にも道も良く通りやすいが、後ろになるほど道は悪くなる。砂利道はほとんどなく、黒土や赤土などで、雨が降るとひどい泥んこ道なのだ。

夕方になつても夕食もなし。そのうえ日中天氣が良かったが、夕方よりまたも雨が降りだす。

我々の荷馬車の後ろに、七・八台がいる様子。少しでも早く着きたい思

いで、泥のでこぼこ道を進む。

少し進んでは車を穴に落とし、引き上げるのに一苦労、回り道は無く一本道だ。近くに一軒の民家もなく真つ暗闇、その上雨はいっこうに止みそうになく、穴に落ちる度に荷を半分くらい降ろし、車を引き上げてはまた荷を積む。

食糧を濡らすまいと天幕を掛けながらの作業で、いっこうにはかどらず、足を取られ泥の中に転んでしまう。雨が降っているので、顔が洗えるだけ幸せか。七台の車は列になっているので、一台が落ちると皆で共同作業だ。途中に一か所土橋があり、何時落ちたのか、前の車も相当難儀をして、渡つて行つたようだ。

暗闇の中、橋の補修をし、一台ずつ通すのも大変。水の中に落とす糧秣もあり、これは諦めて捨てるしかない。深夜になり、あまりの難行に満人が逃げ出し始める。我々の様子をうかがって、馬だけ持って逃げる者もいる。

こうして荷馬車で進むにも、二・三人が道の状況を調べに先行、一寸の油断も出来ない。少しの角度を間違つて進むと、両側の溝に落ちてしまう。所によつては一メートルもあるので大変だし、これ以上無理をして進むことは、かえつて人が倒れてしまうから、半数が荷物の警戒に残り、歩いて部隊に戻るようになる。歩いて進むうち疲労のため、真直ぐに歩けず、泥道に足を取られ、側溝に落ちる者が続出、部隊に着くまでに、五・六台の荷車が道路の中に放置されている。

部隊に着いたのは、夜中の二時頃だ。

先頭が着いたのも、午後九時頃だったとか、一本道なので、道も狭く深夜で危険なため、応援も出せないでいたとのこと。食事だけは用意してあつた。

元気な者に食事を運ばせ、夜の明ける頃から、救助隊を出す。少しの休養のあと、再び引き返す。

明け方より雨も止み、泥んこの道も明るいとたいして苦にならない。荷車までは部隊から二キロほどの所で、部隊駐屯地からほんの目と鼻の先だ。暗闇では遠い所のように、思っていたのだが。

この夜の糧秣輸送は、軍隊生活の一番苦しい勤務であったと、一生忘れることの出来ない、思い出として残る。若い体力と気力があつたから、この苦しみを乗り越えることが出来たのだ。この輸送で折角余分に積んできた糧秣も、捨てる結果となつてしまつたのである。

この糧秣・被服の受領は、ソ連側よりの指示が司令部にあり、ある地点に兵を集結させるので、身の回りを整理して、出発の準備をするようにとのこと。なお、全員をシベリア鉄道経由で日本へ帰すので（ウラジオストク経由）日数が十日くらいかかるから、それなりの準備をするようにとの指示で、急遽糧秣輸送となつたのだ。

この事は、苦勞して輸送した次の日の、二十六日支給と同時に全員に指示され、初めて分かつたのである。

捕虜・輸送（ソ連軍による）

帰国に使用する糧秣・被服であれば、もう少し上手に輸送方法もあつたのに、悔めども後の祭り。

帰国までの物資はすべて自給自足とのことで、用意するものが大変だ。途中どのようになるか、分からないのである。一人当たり次の物が支給され、それを梱包し運ぶ準備にかかる。全部自力で運べるようにするのである。

・衣類はすべて新品とし、夏物着用、冬物は一揃え持つ。

・米は一人二斗以上、毛布二枚、防寒具一式、調味料他

防寒具は輸送に日数がかかりシベリア経由のため、シベリアは冬が早いのでその用意のため。

まず、米を入れる袋である。冬軍袴の両足の所を結び、両足に米を詰める。二斗の米が大体入る。調味料は、ばらばらにならないように、袴下か下着で包む、ほか新品の下着や被服は、敷布で包む。

以上の物を入れる袋作りが大変だ。これは古い毛布を縫つて、小さい物を入れる袋と、全部を入れる袋を作る。全部を入れる袋は強度もいるので二重・三重と縫い込む。袋を背負う帯は毛布を裂いて作る。肩に食い込まないように少し広めに裂くのだ。全部を詰め込むと一人六十キロから八十キロくらいの重さになる。

帰る準備となると、みんな心も弾み、お互い助け合つて、準備もやがて完了した。

昭和二十年八月二十八日、駐屯地の部落を出発。

目的地は、先日糧秣を受領に行った埠頭（松花江岸）で出発地点から三十五キロの行軍だ。

朝から良い天気となる、しかし道は泥んこ道だ。部隊長から、将校・下士官まで自分の物は自分で持てと言う指示があり、全員、完全武装以上の荷物を背負う。集結もまた変わった壮観さを覚える。

朝七時、先頭出発。

道が悪いので一列で進む、二百名あまりの出発だから、一列では時間がかかる。まして重い荷を背負つての行動だ。老兵、病氣、怪我の者の荷物は荷車に積み、満人の馬主を雇い運ぶ、これがまた大変である。前記のとおり道だ。途中進行不能になると、これを元気な者が自分の荷を

背から降りし、道の良い所まで助けて運ぶ。この繰返しが行なわれるのだ。全員が、予定の時間まで埠頭へ着かなければならない。ソ連軍の輸送計画で、時間を遅らすと乗船出来ない羽目になる。全員一列で、どれほどの距離を歩いただろうか、二キロから三キロに及ぶ長蛇の列、それ以上あったかもしれない。六十キロ以上もある重さの荷も、時間が経つに従い肩に食い込み、腰も次第に痛くなってくる。

元気な者、体力のある者は良いが、そうでない者は休んでばかり、仲間同士声を掛け合い、励まし協力して進む。三十五キロの道は遠い。空身でも大変な所、重い荷物を背負って進む足は重く、荷を投げ出したくなる。

しかし投げ出す事は死を意味するのである。誰もがみな一緒に日本に帰る事を望みに、一步一步日本へ近づくため、歯を食いしばって進む、午後三時頃までに全員が無事埠頭に到着した。

近くの満人が、いろいろの食べ物を買りに来る。

特に、多かつたのは餅だった。餅のほかに、ニンニクの干したものなど。餅は日本人特有の好物だ。搗いて伸しただけで味もない。恐らくこの糧秣集積地から、掠め取ったものだろう。全く抜け目のない人種だ。

初めは金銭の取引だったが、後からは物々交換になる。餅は形が大きいので共同で買う者もいる。だが餅だと量にも限度があった。ニンニクは相当な量を持つてきて売っていた。これは風邪の予防にも、薬にもなるので少々買う。

餅は戦友から一切れ貰って食べたが、実に美味かった。

いよいよ乗船、船でソ連領へ行くというのだ。

船は貨客船のようであった。我が部隊が、全員乗れるような、かなり大きい船だ。荷物が大きいので二隻に分乗となる。しかし狭いので甲板まで

一杯の荷物、足の踏み場もないほどである。

甲板ではそれぞれ組になって、夜露を防ぐ用意をする。甲板での火の使用は禁止されているが、ソ連監視兵の目を盗んで飯盒で飯を炊くか、携行缶で炊く。共同でやるので、それぞれが分担し、炊きあげて、分け合つて食べる。おかずは何もなく、早速乗船前に買ったニンニクに、塩を付けておかずにする。少し辛いが、なかなか乙な味だ。風邪の予防にもなるし臭い匂も気にならない。ほとんど入浴をしていないので、汗の具さもあり、皆同じなのだ。

みんな戦争が終わったという安心感から、少々の監視兵の脅しにも平気だ。その日の夕方から乗船が始まったが、なかなか順調にいかない。ソ連側も上部よりの連絡がうまくいかないらしく、何度もやり直す。少し乗せては降りし、また乗せだす。どの将校の言う事を聞いて良いのか分からなくなってしまう。しまいに部隊内で調整をとり、行動する。全く先が思いやられる。無理もない、方正地区の各部隊が、集まって来たのだから大変な数なのだ。

佳木斯（チャムス）師団のほとんどが、この地区に分散していて、それがこの埠頭へ集まって来たのだ。

数千の将兵だ。いかに武器の持たない日本兵とはいえ、少数のソ連兵で掌握し、誘導しようとするのだから大変だし、そう簡単にはいかない。

埠頭にはまだ相当の、食糧や衣類が山積みされている。ソ連の監視兵がいるが、元は全部日本軍の物、土地感も先に来て十分知っているのので、行動は有利だ。乗船の合間を見て共同行動に出る。これらの物資を持ちだし、物々交換の品物とする。

大量の品物（食糧）を満人より手に入れ各人分散、監視兵に分からぬように、乗船と相成つたのだ。飯の代わりに餅を食べ、まんじゅうを食

ベ夕食とする。その夜は船で一泊、朝方出航する。

数か月前この松花江を船で国境の陣地構築へと上って行った。今度はその川の支流から再び松花江の船上の人となったのである。

三か月の間の上り、下り、時の流れを表わした今日の河下り、今はソ連の捕虜として、川の流れに身を任すほか仕方が無い。今度は船も下りなので、船足も速く快調に水面を走る。所々で支流と合流し、本流はますます河幅を広げ、滔々と流れている。

河の兩岸から広い原野が広がり、部落や街らしき風景が見える。もしかして佳木斯(チャムス)辺りではないだろうか……。半年足らずの間に、色々なことがあつた思い出の地だ。佳木斯(チャムス)で水と食糧の補給をし、再び出航した。

平野の中を流れているので、兩岸から畑が続く。船上では何もする事もなく、便所へ行くのにも、人と荷物の間を分けていくので大変だ。行き先を案じつつ寝るだけだ。

ソ連の監視兵が、十人か二十人に一人位の割に同乗し各所に立哨している、変わった行動は出来ない。

二日目から河幅が急に大きく広くなった。そばのソ連兵はアムール川だという。いよいよ黒竜江へ入ったのだ。松花江はバロフスクの数百キロの西部で、黒竜江の本流に合流している。流れはバロフスクから北へ流れ、北サハリンの間宮海峡へ流れ込んでいく。北東へ、北東へと船は流れて行く。

乗船出発して三日目の朝、下船、どうやらバロフスクの埠頭のようだ。昭和二十年九月一日。埠頭まで線路が引かれており、ここから列車輸送だ。陸上のうえ、ここからソ連の国土内を行くので、警戒が一層厳しくなる。

ソ連兵が随分と多くなる、三人から五人の割に監視兵が付く。ちよつ

と変わった動きをすると、自動小銃を突き付け、訳の分からぬ言葉で怒鳴る。

相変らず列車に分乗するのにも時間がかかる。日本国鉄のワム車(箱車)に分乗するのだ。

大陸の軌道幅は日本より三十センチくらい広い。広軌を使用しているので、したがって貨車も大きく、中は広いので、四十から五十名位乗り込む前後にはソ連兵、食糧の貨車が並連なり、二十輛位の編成だ。

ソ連軍の行動は全然分からず、出発も進行方向も全く確認出来ないのだ。ただ知れることは、貨車の扉をメートル位まで、明かりや空気の取入れに許されるだけなのだ。ここから外の景色を見て、判断するだけなのである。

埠頭を出発し、谷間を蛇行する。速度も遅くかなり揺れる。谷間や高い丘に独特な建物が建ちならぶ。ところどころに鉄条網が張り巡らされている。驚いたことに女性の兵士が銃を持って立哨している。かなり兵員の不足が窺える。しかし我が国には女性兵士はいなかった。

列車は順調に走る。列車の扉の間から見える秋のシベリアの景色は荒涼とし、実に広々とした原野で山らしい山は全く見えない。終戦から十日位の間は捕虜という感覚は全くなかった。しかし今は、ソ連軍の輸送指揮官の命令により、動かされ一切の行動を監視される。ちよつとでも不穏な行動があれば、多くの監視兵から自動小銃を突きつけられるのだ。

中には空に向け、威嚇射撃をする兵もいる。こうなつてはやはり敵同士だ。しかし我々は負けたのではない。国が示した停戦でやむなく武器を捨てざるを得なかったのだ。小銃を突付けられると、「むかつ」と来る。こちらが睨むと相手も恐ろしくなるのだろう、空にむけて発砲し、威

嚇してくる。若い兵士が多く無理もない。将校、下士官だとなかなか話の分かる者もいた。(手まねで対応する)監視兵が多いので、こちらも油断が出来ない。

列車はだんだん原野から山林へと入っていく。原野を走っているときは、あまり揺れなかったが、途中からやたら揺れが激しくなる。景色も今までと全く違う。

途中ときどき停車するが、五分程度、大小用便だ。小でも忙しいのに、大の方だと大変だ。半分くらいで監視兵に追い立てられる。また次まで我慢しなければならず、これだけは我慢できるものではない。仕方なく走る列車の扉の間につかまり、外へ尻を向けて用を足す、他の人がその人が落ちないように、つかまえているのだ。小用も同じで大変で、臭いなどと言っていられず、互いに同じ思いをする。上下動と左右揺れの連続で、する方も支える方も必死だ。

食事の時もこれまた大変、山林に入っているので風倒木はいくらでもあり、水のあるところに停る。食事のための時間が決められる。(ソ連軍の都合で、長かったり、短かったりする)

貨車内で、班、グループごとに炊飯の作戦が練られ、列車が停ると同時に行動する。他の組に負けると飯にありつけない。飯盒の米を研ぐ者火をおこす者、薪を集める者共同で分担する。火をうまく焚かなければ、飯盒飯の煮方も遅くなる。ソ連からいつ出発の音がかるか分からない。調子が悪く時間が足りなくて半炊きの飯では大変だ。これがまた各組の要領が悪くて、しくじる組もあった。

おかげがないのでせめて飯だけでも旨い物を食べなければ……これら飯盒炊飯も監視兵が、自動小銃をもつて取り巻かれた中、藪のなかで炊飯作業であるから、薪も限定される。終了時間が近づくと、ソ連兵に急きた

てられるので大変、もう少し、もう少しと思っていると、ソ連兵が早く火を消せと、蹴飛ばし火を消されるので、飯盒だけはひっくり返されたら大変なので庇う、全く油断が出来ない。

列車はますます山の中へ入って行くようだ。相変らず線路の路盤は悪く、ここ何年も走ったことがないのだろう。いつ脱線しても不思議ではない。枕木は土の上に置いただけで、砂利などは間に一粒も無く危険このうえも無い。

よくこのような線路に列車を走らせるものである。日本では全く考えられない行動である。

列車は進んでは停り、動いては止る。これでは一日に何キロ進むのかわからない。燃料が無くなると、近くの木を積み込む。線路の側の所々に五十センチほどに切った木が積んである。この木が(松類)機関車の燃料なのだ。力が出ない筈だ。

水がなくなれば途中の小川から給水する。また、線路の下の土が流失して線路が浮いている。近くの丸太を集めて土台を組み、最徐行で列車を渡す。そんな調子だから脱線もする。そんな時、今度はテコと人力で克服してやっと地盤のよい所まで進む。

これらの地帯は広々した湿地帯で、ここを抜けるのに一日以上もかかった。わずか数キロの所である。山林は益々深くなるばかり、不安が一杯、どうやら太陽が出る方向、東へ進んでいるようだ。

途中から進行方向が変わったので、日本部隊本部側からソ連輸送指揮官に伺ったところ「こちらの方が近いので、早くウラジオストクへ行かなければ、港が凍結して船が出入り出来なくなる、少しでも早く行くので心配はない」ということだ。

全く子供に言うような嘘を平気で言う。

シベリア鉄道はハバロフスクからウラジオストックまで、直通の一本線だけ、平野の中心を、南へ向かって進んでいる。太陽に向かって走る、広い道路も見当たらない。

線路はハバロフスクから分岐し、北方コムソリスク方向へ行っているが、我々の乗った列車は、一度も大きな川の鉄橋を渡っていない。そうするとその中間を東に走っている線路だ。地図にもない。

日本人ならある程度の知識もあり、満州の兵隊ならソ満国境、シベリア地区のことは、地図が無くとも頭の中にある。ましてや国鉄出身、世界の鉄道線路のことも分かる位だ。列車に乗ってから四日目、なかなか列車が進まなくなった。指揮官と幹部同士は何度かの交渉でも

「幹部からの命令で出発を見合わせている」また

「もう少し待つように」との事、その内に

「ある貨車の兵隊が赤痢になった」とか……

これは後で分かった事だが普通の下痢で、衛生兵がいくら説明しても、赤痢で伝染病だと言って聞き入れず、赤痢患者にしてしまった。この兵隊は二・三日で治って元気になった。このとき軍医は乗っていなかった。

ソ連側はあくまで赤痢として全員下車させる。四方全くの山の中である。全員名目だけの防疫をただけだ。こんな山の中で、白い粉薬をのまされたが、匂いも無く変な粉としか受取れなかった。ただの白い粉だったかも知れない。こんな物まで用意していたとは、この用意周到な計画に呆れるばかり。

貨車から降ろされ、防疫が済んだ中隊から「順次入れられた所は、大木が（松）鬱蒼と茂る森林地帯の中を切り開いて作った、監獄のような所だ。二百メートルくらいの四方を、鉄条網が三重に張られ、四方の角には高い望楼が建ちはだかっている。

どう考えて見ても、普通の場所でないことは一目瞭然、全員がこの建物に入れられる。中には丸太組の建物が数戸あり、建物の外は草が茫茫、建物の入口は小さなものが二・三箇所ある。

家は低い、中に入ると昼尚暗い穴蔵のようだ。一つの棟の中は両側が二つに分かれ・中には両側壁二段に仕切られている。明りとりか、小さな窓が片側に四個ある。通路は土間である。

このような部屋の中に、中隊別棟割が行なわれ、それぞれ班別に部屋割に入る。

一応、雨、風、霜は防げるし、揺れもなく、手足を伸ばして寝ることが出来るだけ今までよりました。その夜は久し振りに、手足を伸ばしてぐっすり眠りに着く。翌朝起きて外へ出て見ると、我々が乗って来た列車は、いなかった。いよいよ我々はシベリアの山の中に運ばれて来たのだ。

我々は捕虜なのだ。そう簡単に帰す筈がない……